

2021/03/28

ヨハネの福音書 講解メッセージ④

『聞かれる祈り、聞かれない祈り』ヨハネ 14:1-14:17

■神を信じ、わたしを信じなさい

「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。わたしの行く道はあなたがたも知っています。」(ヨハネ 14:1-4)

「心を騒がせないで、永遠のいのちを持っていることを信じなさい。」——これが、ヨハネの福音書の一貫したテーマです。

イエス様はこれから十字架に架かり、その後、天に帰られます。それは、私たちの場所を備えるためです。父のもとには、すでにたくさんの住まいがあり、私たちのためにその場所を備えに行くとは、どういう意味でしょうか。これは、十字架の意味がわからないと理解できません。

十字架には三つの意味があります。

1. 私たちの罪と死を背負うため
2. 悪魔を滅ぼすため
3. 愛を明らかにするため

アダムとエバが、エデンの園で、悪魔にそそのかされて、人類に死が入り込み、私たちは滅びるものとなってしまいました。エデンの園は、神が造られた平和な神の国です。それにもかかわらず、悪魔が入り込んだわけですから、私たちを天国に迎え入れるためには、同じことが起こらないように、まず悪魔を排除する必要があったのです。つまり、「場所を備える」とは、悪魔を滅ぼすという意味です。イエス様は、十字架で悪魔を打ち砕き、御国を完全に整えるために天に戻られるのです。

「トマスはイエスに言った。「主よ。どこへいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道が私たちにわかりましょう。」イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」(ヨハネ 14:5-6)

世の中では、人は死んだら生まれ変わるとか、天国に行くとか言われますが、聖書が教えているのは、イエス・キリストを信じなければ、復活はないということです。イエス・キリストだけが、道であり、真理であり、いのちなのです。

アダムを通してこの世界に入ってきた死は、神と私たちを完全に遮断しました。死とは有限性で、始まりがあって、終わりがあるということです。それに対して、神の世界は永遠で、始まりも終わりもありません。ですから、永遠と有限は関わりが持てないのです。それで、有限の世界に生きている私たちの側から、神のもとに行くことは不可能なため、イエス様が、神様と私たちをつなぐ道となるために、私たちのところに来てくださったのです。イエス様が、何度も「私を信じなさい」と繰り返しておられるのはそのためです。

「あなたがたは、もしわたしを知っていたなら、父をも知っていたはずですが。しかし、今や、あなたがたは父を知っており、また、すでに父を見たのです。」ピリポはイエスに言った。「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」イエスは彼に言われた。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください。』と言うのですか。」(ヨハネ 14:7-9)

以前、イエス様は、「私は父から遣わされた。」という言い方をしておられましたが、この時は「私を見た者は父を見た。」という言い方をなさいました。時満ちて、三位一体の真理を明らかにしておられるのです。

しかし、すべての弟子がそれを理解したわけではありません。そのため、ピリポは「父を見せてください」と言いました。ここに、「納得できないと信じない」という、人間の弱さを見ることができます。納得することと信じることは、まったく別物です。神のことばは、理性の対象ではなく、信仰の対象なのです。

しかし、このような質問にもイエス様は答えてくださいます。ですから、私たちは、背伸びをする必要はありません。信じられなければ、「信じられません。どうぞ教えてください。」と聞けばよいのです。神様は答えてくださいます。神の愛は、私たちの弱さをそのまま飲み込みます。あなたの弱さや疑いを否定したりしません。

■わざによって信じなさい

「わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているのではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。わたしが父におり、父がわたしにおられるとわたしが言うのを信じなさい。さもなければ、わざによって信じなさい。」(ヨハネ 14:10-11)

イエス様は、「もし、信じられなければ、私の業を見て信じなさい。」と言われました。つまり、イエス様の奇跡は、信じられない人を助けるためになさったことなのです。ただ信じることができれば幸いです。しかし、信じるできない私たちの弱さを助けるために、イエス様は奇跡を起こしてくださったのです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしを信じる者は、わたしの行なうわざを行ない、またそれよりもさらに大きなわざを行ないます。わたしが父のもとに行くからです。」(ヨハネ 14:12)

イエス様が行った奇跡の筆頭は、病のいやしです。さらに、死人をよみがえらせることもなさいました。それよりも大きな奇跡を、私たちは行うようになるというのです。

イエス様は、病をいやしてくださいましたが、体のいやしは部分的ないやしであって、本当に必要ないやしは、罪のいやし、つまり苦しみからの解放です。

罪とは、イエス様という中心からそれていることです。私たちの苦しみは、そこから生まれます。ですから、いやしとは中心に戻すことです。「体の病をいやす」とは、本来の姿に戻すことであり、「罪をいやす」とは、本来の中心であるイエス様に戻ることです。このほうが体のいやしよりも大きな業なのです。

そんな大きな業を私たちは行えるのでしょうか。行えるのです。それは、イエス様が父のもとに行くからだ、とイエス様は言うておられます。それは、十字架によるものです。イエス様の十字架の最も大きな意味は、愛を明らかにすることです。私たちの罪という病気は、神の愛がわからないという不安から生じています。そのため、中心からそれてしまうのです。

私たち人間は、誰もが神のいのちをいただいて造られています。ですから、理屈抜きに神の正義を知っており、良いことと悪いことを知っています。しかし、この世界で神を知ろうとしても、何も見えません。アダムによって入り込んだ死によって、この世界には永遠も自由もなくなり、人は神がわからなくなってしまいました。その不安から、私たちは中心からずれて、見える安心を求めて生きています。これを罪と言います。それを中心に戻すには、愛されている自分を確認するしかないのです。

「あなたは愛されている」、そのことを伝えるために、イエス様はいのちを捧げました。ここに愛があるのです。イエス様が罪人のために十字架に架かったのは、罪人を愛しているからです。イエス様の愛は、すべてを飲みます。私たちは十字架を通して全き愛を知ようになり、イエス様の打ち傷によっていやされる者となりました。

イエス様が十字架に架かって父のもとに行くことで、私たちがもっと大きな業をするようになるとは、イエス様の十字架を知り、それを延べ伝えることで、神はあなたを愛していると伝えることができるようになるということです。これが、イエス様が言われている大きな業なのです。

イエス様は十字架に架かることで、本気であなたを愛していることを示してくださいました。十字架を手にした私たちは、十字架を使ってさらに大きな業を行えるのです。

■神に解決を求めなさい

イエス様のなさった業の中には、病のいやし以外にも様々な奇跡があります。つまり、ここから私たちが知るもう一つのメッセージは、神様はどのような問題も解決することができるのだから、「祈りなさい」「神に解決を求めなさい」というメッセージです。ですから、イエス様は続けて次のように言われました。

「またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。」(ヨハネ 14:13-14)

「求めるなら与えられる」という大切な原則を確認するために、イエス様は、「何でも求めなさい」と言われました。それは、私たちの信仰を訓練するためです。

神様と私たちの関りはキャッチボールです。神様は、私たちに友としての関係を築くことを求めておられます。神様はただ一方的に言葉を投げただけではなく、何でも受け止めるから求めてごらん、と投げかけておられるのです。

ところが、祈り求めていると、聞かれる祈りと聞かれない祈りがあることに気づきます。聞かれない祈りには、二つの特徴があります。

「ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。そういう人は、主から何かをいただけるとってはなりません。そういうのは、二心のある人で、その歩む道のすべてに安定を欠いた人です。」(ヤコブ 1:6-8)

「願っても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。」(ヤコブ 4:3-4)

祈りが聞かれない理由の一つは、疑う心があるからです。これは、私たちに祈りが必要な理由の一つでもあります。祈ることで、疑う心と戦うのです。

二つ目の理由は、自分の快樂のために使おうとしている時です。自分の名誉などが動機である場合、願っても受けることはできません。

つまり、聞かれる祈りとは、私たちの心がしっかりと神に向いて、自分の快樂のためではなく神を中心とした祈りということになります。祈りとは、心を神に向けるための訓練であると言うこともできます。

しかし、それならば、「何でも、それをしましょう。」というイエス様の約束は、嘘なのでしょうか。そんなことはありません。確かに、神様は何でも聞いてくださいます。しかし、何でも聞いてくださるからこそ、私たちの祈りに答えない場合があるのです。あなたの祈ったこ

とよりも良い道があると知っておられるとき、神様は、あえて答えることなく沈黙なさいます。祈ったのに聞かれないのではなく、祈ったからこそ、神様は沈黙しておられる時があるということです。

ですから私たちは、何でも祈ればよいのです。間違っていれば神が止めてくださいます。そして、あなたにもっと良いもの、もっと必要なものを神様は用意して待っておられます。そのことに気づいたとき、私たちは、確かに神は何でも祈りを聞いてくださるお方だと知るので。祈っても願い通りにならない時、どうして聞かれないのかとつぶやいてはいけません。時が来れば、神様は、あなたの祈りに答えて、良いほうへと導いてくださったと知ることになります。

神様はどんな祈りでも受け止めてくださいます。ピリポたちはつぶやきましたが、それでも神は受け止めて、答えてくださいました。神の愛は制約をつけません。無条件です。

■心を中心に戻す

さて、どんな祈りも神様は答えてくださり、良いほうへと導いてくださいますが、疑って祈ることと、自分の快樂のための祈りはきかれなないと、初めからわかっています。これら二つのことに共通しているのは、心が神に向いていないということです。つまり、中心からずれているということです。では、どうやって私たちの心を中心に持っていけばよいのでしょうか。イエス様は次のように言われました。

「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずで
す。」(ヨハネ 14:15)

神を愛し、心を神に向けたいと願う時、それは具体的には、戒めを守ることになります。行いを守ることが大切なのではなく、神の戒めに目を向け、その戒めを具体的に行う時、私たちは中心に向かって生きようとするようになるからです。イエス様が「戒めを守るはず」と言われたのは、「心を中心に向けるように。そして、その中で神に求めるように」とアドバイスしてくださったのです。なぜ戒めを守る必要があるのか、それは、心が中心からそれないためです。

ところが、戒めを守りたいと思っても、現実にはとても実行できないという問題に、誰もがぶつかり、多くの人々が、自分は祈ってもダメなのかと打ちのめされてしまいます。

そこで、イエス様は次のように言われているのです。

「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。」
(ヨハネ 14:16-17)

私たちには助っ人が必要です。戒めを実行したくても、一人では無理なのです。そのことをイエス様はわかっておられるので、助け主が与えられると教えてくださると同時に、実はその助け主は、すでに私たちの中に与えられており、私たちはその方を知っていると言われました。いったい、どういうことでしょうか。それは、私たちがすでに永遠のいのちを持っているということです。

永遠のいのちとは、朽ちない霊のからだのことです。私たちは、朽ちない霊のからだをもってよみがえりますが、それは、私たちの肉体の死を通してやってくるのではなく、もうすでに与えられているのです。それが永遠のいのちです。

「私たちはすでに永遠のいのちを与えられている」と、イエス様は、くりかえし語っておられます。永遠のいのち、すなわち、霊のからだを着せられたから、私たちは神の国を体験することができ、イエス様を信じることができたのです。私たちがイエス様を信じることができたのは、私たちの力ではなく、御霊の働きによるものです。神様が私たちに着せてくださった霊のからだ（永遠のいのち）を通して、私たちが知っていた神を確認することができたということです。私たちがイエス・キリストを信じていることが、私たちの中に助け主がおられる証拠なのです。

私たちの中に御霊が住んでおられるので、あなたは決して一人ではありません。助け主が共にいてくださるのですから、私たちは心配しなくても良いのです。だから、心を騒がせてはならないと言われているのです。

私たちは、自分の力では戒めを守ることも、中心に戻ることもできません。けれど、助け主が共にいてくださるのですから、「その方と共にやりなさい」、「助けてもらいなさい」とイエス様は励ましてくださっています。自分ではどう祈ったらよいかわからなくても、聖霊様は助けてくださいます。私たちは、ただ神の助けを借りて中心を目指して行けばよいのです。

神様はあなたを決して一人にはしません。私たちの弱さをすべて飲み込んでくださいます。だから、自分の足りなさを、安心してすべてお任せしましょう。それを助ける助け主はもう与えられており、あなたはその方を持っているのです。